

シンポジウム「大学の地域配置と形態」雑感

吉本, 圭一
九州大学 : 助教授

<https://hdl.handle.net/2324/18901>

出版情報 : 大学組織の再構築 : 第29回(2001年度)研究員集会の記録, pp.67-71, 2002-11-01. 広島大学
高等教育研究開発センター
バージョン :
権利関係 :

シンポジウム「大学の地域配置と形態」雑感

吉本 圭一（九州大学）

本シンポジウムは、「大学組織の再構築」をメインテーマとする2001年度研究員集会2日間の最終セッションとして、「大学の地域配置と形態」をめぐる3名の基調報告とフロアとの議論によって進められた。加野芳正さんと一緒に司会した立場から、この場で論じられたことについての感想を述べるとともに、振り返って、議論されずに終わった論点などについても確認していきたい（なお、「」内は必ずしも発言内容そのものではなく、私なりに要約したものである）。

本研究集会では、初日冒頭の市川昭午さんの講演に触発されて、「大学の死」をめぐる議論が多く展開しており、本シンポジウムにも重要な論点として引き継がれることになった。参加者は、今の「大学」についての診断や、延命・健康回復のための可能な処方を期待しながら、「地域配置」と「形態」というマクロな政策的視点を踏まえた議論に加わっていったように思う。

1. パネラーの報告について

簡単に進行を振り返ってみると、まず広島大学高等教育研究開発センターの「大学の配置」研究グループを代表して、羽田貴史さんと小方直幸さんから、それぞれ「大学の統廃合と連携にかかる古今東西の動向」および「大学と地域の関係の発展構造」についての報告があった。議論の延長に、「地域志向性」、「単科大学と総合大学」、「大学のアイデンティティ創出」、「地方分権化との交錯」などの論点が報告書のまとめに提示されており、十分に敷衍されなかったけれども、これらがきわめて重要であるとの印象をもった。続いて長らく高等教育政策を観察し、かつ参与観察してこられた黒羽亮一さんからは、「国立大学の設置形態・管理運営をめぐる政策の歴史的展開」について報告があり、いわゆる「大学の自治」「学問の自由」をめぐる大学と政府の緊張関係の長い歴史と、それが1990年代に必ずしも「文部省や大学人のこの議論に対する弛まぬ検討の結果」としてではなく、いわば外圧の中で急展開した過程に言及された。最後に、文部科学省の合田隆史さんから「国立大学の構造改革」と題して、社会との総合作用を通して進化する「大学」のあり方、その相互作用を促進する文教政策のあり方について報告があった。

2. フロアとの議論：「大学の進化」か「大学の死」か？

フロアを交えての議論では、とくに、国立大学の独立行政法人化などの焦眉の諸課題

について、そしてその政策担当者としての合田さんに質疑が多く集まった。時節柄、話しにくい要素もあっただろうと思うのだが、しかし、合田さんは「私見」という限定付きながら相当大胆に、過去の政策の評価と今日の政策の基本的な転換点を主張した。すなわち、階層的な構造についての有本章さんの質問に対しても、戦前の「二元二層モデル」からの展開としての高等教育の階層的構造は、これまで百年間の文教政策の結果でもあり、また新たな政策形成の準拠枠組みであったことを認めつつ、いまの政策的な志向は、これまでの政策的枠組みの「硬直性」を打破して、教育研究成果の適切な評価に基づく資源配分と、そうした配分に基づく従来型とは異なる構造を再構築しようというものである、という。

また、大学の歴史と発展という長期的な時間軸を踏まえた「高等教育のグランドデザイン」をめぐる議論にも、山野井敦徳さん、原山優子さんからの質問が集まった。合田さんからは、グランドデザインを誰がどう描くのかという点で、新しい方法論が提起された。すなわち、文部科学省が、個々の高等教育機関の役割を指定し、いくつかの種別の中に位置づけるという種別化構想ではなく、「進化の基本である揺らぎ」をシステムに組み込むという意味で、大学と政府との相互作用の中から、種別ないし類型のクラスターが徐々に形作られ、明確化していくというプロセスが強調された。各大学等が、どのようなタイプの機関を目指すのか、個々にミッションを設定し、他方、政府が、それにふさわしい教育研究を行うための資源を配分し、かつ成果の評価を行うというモデルである。

ただし、どのようなものをグランドデザインというのか、その内容については時間的にも説明がたりず、いくぶん未消化におわったように思う。また、アクターを大学と政府という軸のみで論じている点などは、黒羽さんが論じた管理運営をめぐる「大学と政府の間での規制と自立の歴史」とも連動しており、どうも「グランドデザイン」だけ新しいアプローチを始めたとか、大きな政策転換をしたとも見えにくい。この点は私なりの論点として後述したい。

上記と関連して、本多二郎さんや喜多村和之さんからは、研究集会全体に私学セクターの位置づけが議論されていない、また文部科学省の新しい政策は私学に及ぼす影響を事前に研究・考慮の上での政策形成であったのかどうか、という意見・質問があった。たしかに、合田さんの「建学の精神」、「私学の独自性」というものを尊重しつつ、「研究面」におけるCOE等での支援に私学を取り込むという回答は、一つのソリューションではありうる。ただし、黒羽さんの指摘のように、この研究集会の議論の基調が、どちらかといえば「大学を学術の中心」として、教育よりも研究に焦点をあてたものであるために、あるいは近年の文教政策がまさしくそうであるために、そうしたソリューションが妥当するよう見えるのであって、高等教育の根幹に「学位」と「教育」を位置づけるならば、もう少し議論が必要なところでもある。

「大学の理念」を探るという点で、「大学の進化」あるいは「大学の死」という議論に直接言及した議論として、小方さんからは、地域との関係で、大学が地域に対して交流の

窓口を開くという時代から、いろいろな地域の要望をまとめて大学に伝える大学外の仲介・連合組織を創る時代、そしてそうした組織が大学外にそうした要望を向けていくという時代へと「発展」する可能性が報告されていた。他方、合田さんは「大学が何もしなければ市場や経済産業省が受け皿を創るだろうが、大学は進化しそうした需要に〈対応〉できるし、していくべきだ」という「進化論」を論じている。この点については、羽田さんや山野井さんから、そうした大学の「生き残り」対応自体が「大学の理念の死」ではないのかという疑念が出された。つまり、「器としての大学の死」と「大学の理念的な死」とを峻別しておく必要があるが、この受け継がれ進化していく「理念」をどうとらえるのか、じつに根元的で評価しにくい問題にいきついたというところであろうか。

3. 残された論点

当日は限られた時間の議論ではあったが、彼方に続く論点がいくつか見えてきたように思う。そのうち「コミュニティー」と「ネットワーク」について取りあげてみたい。

(1) 大学を動かす三角形力学における「コミュニティー」の位置

「政府」、「大学人」、「市場」という大学を取り囲む三角形の力学をみると、本研究集会では、政府と大学人との関係に議論が集中し、「市場」が論じられなかったのではないだろうか。もちろん、「大学が何もしなかったら何が起きるか」など、その間隙を「市場」が埋めるし、それが企業型大学であったり経済産業省のアプローチだったりするという形での議論は可能である。しかし、「市場」の概念の吟味こそが必要なのではないだろうか。もともと、この頂点のひとつの「市場」というのは、実は2つの次元で理解されるだろう。入学者の市場、つまり保護者などの「学歴」をもとめる需要と教育機会の供給という市場と、卒業生の市場、つまり大学が卒業生を供給し、企業が大卒者を需要するという市場である。ここで、日本では、大学入学希望者は全国にあり、大卒需要は大都市部にある。とすれば、大学の立地する地域という枠を設定して考えると、「市場」が分裂する。むしろ、その場合には、そこを「コミュニティー」という概念で置き換えることが可能であり、また有益なのではないだろうかと思っている。

つまり、コミュニティーの側から、「大学」および「高等教育システム」のPLAN-DO-SEEをコントロールするというのが、合田さんのような「高等教育のグランドデザイン」を再構築していくための必要条件ではないだろうか。政府が多様な高等教育機関の種別カテゴリーすら指定しないとすれば、各機関は何をもって「市場」に応えるのか。またその「市場」に答えていることをどう納税者に説明し、どのような公的資源配分を要求できるのか。私は、県レベルあるいはもう少し広域での「コミュニティー」というものを基盤として、はじめて高等教育機関が自らの固有の位置付けを設定することができるのではないかと思う。大都市圏ではちょっと想像できない議論かもしれないが。

(2) ネットワークとしての総合大学・大学統合・連携

広島大学の「統合・連携」についての研究グループの研究成果は、必ずしも当日の限られた時間内の議論には直接反映されていなかったようにも見えるが、上述のような「コミュニティ」という接点を設定することによって、極めて先端的な課題設定であったことがあらためて確認できる。

なぜ、大学が統合し、あるいは他の大学や地域の諸機関と連携するのか。もちろん、経営上の選択があるし、また行財政的な要請から来ることもありうる。ただし、何が大学人を内発的な形で動かし、地域を動かしているのかを考えてみると、羽田さんの「規模の経済」から「ネットワークの経済」へという論点は実に的確であるし、小方さんの「大学と地域の仲介組織が独自の行動原理を獲得する」という発展の第3段階のモデルには驚かされた。そこには、あきらかに「ネットワークを経営し、仲介組織を方向付ける」アクターを必要としている。

ネットワークが社会的資本形成を導く条件として、J. S. コールマンは、ネットワーク関係が閉じていることをあげている。すなわち、複数の単科大学よりも総合大学にメリットがあるとすれば、(総合大学にいるといやというほど理解できるが)、異分野・異部局間でのネットワーク・ハブとしての「本部」、つまり「大学」という張り子(そしてさまざまの部局間会合)である。大学人はそれぞれの専門分野を準拠集団とし、志向するものは個々バラバラだけど、それをそのままにして閉じたネットワークを存在させているという興味深い形態である。とすれば、その概念を地域コミュニティにまで拡大して、〇〇大学システム(短大等も包括した形で)として、〇〇の中に地域ブロック名を冠したようなものが成立することも、あらたな「進化」であるのかもしれない。

いろいろ、「夢」ははばたくが、この続きは、主催者の広島大学の研究グループで、これらの議論をどのように総括されたのか、その成果としての本叢書を読み通してから、また考えてみたい。